



やえ部門 進路講演会 テーマ「相談支援事業所ってどんなところ？」

やえ部門では、7月22日に進路講演会が行われました。今回は、「相談支援事業所ってどんなところ？」をテーマに、株式会社円グループ 相談支援事業所「暖」より、所長の峰岸さんと大沼さんを講師としてお迎えし、相談支援事業所における計画相談事業内容や大切にしていること等についてお話を伺いました。紙面の関係上、講演の一部分となりますが、ご紹介します。

まず、立川市の相談支援事業所の状況です。市内に17カ所あり、そのうち児童を対象にしている事業所は8ヶ所です。今、相談支援を希望する方がとても多くて断られてしまうことも多い状況なので、早め早めに相談していくことが大事です。また、相談支援事業所ごとに特色があります。それぞれ得意分野が、身体障害、知的障害、精神障害、児童などあり、お子さんに合うかどうかも含めて事業所を探すときに意識していただけたらと思います。

さて、相談支援事業所の役割の一つとして、計画相談事業というものがあります。既に利用されている方も多いと思いますが、放課後等デイサービスを利用したいときに、サービス利用計画書をご本人や保護者の方と面談・相談して作成し、福祉サービス事業所と繋げていきます。そして、役所からの決定を経て、利用が開始されますが、その放課後等デイサービスが本当に本人に適しているのかどうか定期的に面談をしてモニタリングを行います。最初の三か月は毎月、その後は半年に1回、もしくは他のサービスを利用している場合は3か月に1回となることもあります。お子さんに適したサポートを継続していくためにも、このモニタリングが大事で、何か必要なことがあれば関係機関が集まって話し合う場を設けたりもします。

また、高等部卒業時、お子さんへのサービスを成人用に切り替えることや、日常生活で困っていることについても相談支援事業所に相談してください。特に大人へのステップということに関しては、子供のうちは、親御さんを中心にお子さんの支援について考えていくのですが、18歳を超えて大人になってくると、「あなたはほしい？」と、本人の意思や意向が中心となるように変わってきます。自分の気持ちや考えなどを伝える力を求められる場面が一気に増えてきます。そのために、ハンドサインや声の出し具合とか、ちょっとした表情の変化でも良いので、自分のイエス・ノー、嫌い・好きなど、そういったものをどんな形でも良いので、伝えられる何らかの方法を今のうちから見つけて、それを関わっている人たちと共有してほしいと思います。

大人になると、一人で過ごす時間も必要になってきますが、一人で過ごせるようにするためにはどういったサポートがあったら実現可能なのかっていうところも一緒に考えていけるといいと思っています。

将来を見据えてということに関しては、親亡き後という言葉を目にすることがあるかと思ます。本当に何かあってからだと、相談に来ていただいても、打つ手が限定的になってしまうので、ちょっと先の未来を考える、未来に備えるということが本当に大事になってきます。どこに相談したらいいかわからない時には、まずは聞いてみようということで構いません。利用中の計画相談の方でもいいですし、市役所の担当者の方でもいいので、まずは話すところから始めていただけたらと思います。

コミュニケーションが取れる手段、一人で過ごせる力、そして健康維持のためにかかりつけ医ということも重要になりますので、一緒に考えていけたらと思います。

このように相談支援事業所では、就学前から高齢になるまで、ご本人だけでなくご家族の状況も含めてサポートしていくことができます。

以下に事例をご紹介します。

事例①

支援学級に通う小学5年生、放課後等デイサービスをABCの3カ所利用しています。そのうちのB事業所で、歩行での移動中に、置いてある自転車を倒す行動が見られました。B事業所は利用のお断りを検討することとなったため、相談支援事業所と3カ所の放デイが集まり、ケース会議を行いました。会議では、A事業所の場合、歩行時、支援者とご本人との立ち位置の工夫により、自転車を倒すことがないということが分かり、B事業所もその方法を取り入れ、利用の受け入れを継続できることになりました。→相談支援事業所が仲介役となり、ケース会議を設定することにより、福祉事業所同士をつなげていくことができます。

事例②

計画相談事業とつながっていなかった事例ですが、愛の手帳4度50代の女性で、学校を卒業してからずっとB型の作業所に通っていました。お母様が亡くなり、お父様と2人暮らしでしたが、お父様が脳梗塞で倒れ、退院のめどが立たないという状況になりました。急なことで、ご本人が買い物や掃除、洗濯といった生活スキルをもっているのか、親せきなど頼れる人がいるのか、誰も分かりませんでした。そのため短期入所となった後、施設に入所することになりました。→もっと早くから、本人やご家族の情報が分かっていたら、グループホームや、ヘルパーさんを利用しながら自立して生活するという選択肢にもつながったのではないかとすると、計画相談事業の大切さを感じます。

事例③

愛の手帳4度で特別支援学校卒業後一般企業に障害者雇用で就職した方です。気が付いたら両親共に70台後半で将来のことが心配になりました。今まで福祉サービスを使ったことないため、どのようなサービスがあるのか分からなかったのですが、役所から相談支援事業所につながり、グループホームに入ることができました。→子供の成長の30年40年は思ったよりも早いので、困りごとは何もないという時でも、福祉サービスにつながっていることは大事です。

相談支援事業所の相談支援専門員は、サービス受給者証を受け取るために、ただ計画を作ってくれる人ではなく、本来は利用者とサービス事業者の間に入ることによって、事業者への代弁をするのが仕事となります。また、学校とも連携していくことができます。その他、地域の福祉のニーズを明らかにしてその必要性を検討することも行っています。例えば、ニーズが多くあるのに福祉事業所が足りない等、行政にたくさん働きかけていくことで、サービスの実現につながっていきます。そのためには、まず相談支援事業所に、ご本人やご家族のたくさんの声を聞かせていただきたいです。